

# 加藤周一とフランス文学（２）－「抵抗の文学」をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩津, 航, IWATSU, Ko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00066969">https://doi.org/10.24517/00066969</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 加藤周一とフランス文学(2) — 「抵抗の文学」をめぐる

岩津航

はじめに

加藤周一(一九一九—二〇〇八)は、一九四六年以来、フランス文学に関する論考を矢継ぎ早に発表する。そのうち、一九四七年頃までに取り上げた現代フランス文学は、ほぼ一九四〇年までに発表された作品を対象としている。学生時代にヴァレリーからフランス文学に関心をもった加藤は、しだいに同時代のフランス人作家を読むようになった。一九三〇年代後半から日本の言論状況が統制されていく時期に、彼が注目したのは、戦争に対してフランスの文学者がどのように反応したか、ということだ。とりわけ『ウーロップ』(Europe)誌に寄稿する三人の作家、すなわち、ロマン・ロラン、ジャン・リシャール・ブロック、ジャン・ゲエノを熱心に読んだ。その読書経験があったからこそ、戦後になって初めて読んだレジスタンス文学に、早い時期から反応することを可能にした、と考えられる。本稿では、「抵抗の文学」という観点から、『ウーロップ』とレジスタンスに関する加藤のフランス文学読解を跡づける。

### 1 『ウーロップ』誌の周辺

#### ロマン・ロラン

若き加藤周一にとつて、現代フランス文学を代表する作家はロマン・ロラン(Romain Rolland, 1866-1944)だった。『現代フランス文学論I』(一九四八)において、彼は次のように述べている。

彼等の発言と行動とのなかに現れた善意と人間性(人類)に対する信頼とは、私の魂によびかけるし、私はそれだけのためにも、現代フランスの或る作家たちを読みたいと思ふ。否、少くとも或る時期に、(その時期は必ずしも終つたのではない)私が人間精神に対する敬意を失はなかつたとすれば、それらの作家たち、殊にロマン・ロランの存在を通じてであつた(一)。

「人間性(人類)」とあるのは、フランス語の *humanté* がどちらの意味にも取れることを念頭においているのだろう。長編小説『ジャ

ン・クリストフ』(二九〇四—二二)で有名なロマン・ロランだが、加藤にとつてのロランは、それにもまして、第一次大戦中に刊行された平和主義的エッセイ『騒乱を超えて』(一九一五)の作家だった。

第一次大戦においてフランスとドイツが敵対するさなかに、スイスのジュネーヴで知識人に向かって反戦を呼びかけたロランは、双方のナショナリストから非難された。それでもロランは精神の独立を訴え、「ヨーロッパの選良、私たちは二つの国、すなわち私たちの地上の祖国と、今一つ神の国をもっている。一つの国では、私たちは客人であり、他の国では私たちが建設者である。前者には、私たちの肉体と忠実な私たちの心情を与えよう。しかし私たちが愛するところの家庭も、友人も、祖国も、いずれも、精神にたいして何の権利ももたないのである<sup>(2)</sup>」と断言した。加藤が「善意と人間性」と呼んだのは、このような「自由な精神」を発揮できる環境を作り出すための努力であり、ロランはそうした知的努力を体現する存在だったのである。

擾亂のなかで、理性をもつてみ、あやまりなく理解し、しかも孤獨のなかで、勇氣なく、なすところなく、ただ平和を祈るほかはなかつた多くの魂にとつて、第一次大戦に、また第二次大戦にも、『擾亂をたち超えて』しづかな、勇敢な、巨大なロマン・ロランの愛と理性との存在は、ほとんど唯一の希望であり、慰めであり、人間的矜持の根據でさへもあつた<sup>(3)</sup>。

第一次大戦期にロランが発した知識人への呼びかけに、加藤は第二次大戦期の知識人として応答しようとした。とりわけ加藤がロランに学んだのは、知識人が戦争プロパガンダの推進役に墮してしまう危険性だった。ロランは『騒乱を超えて』において、ドイツとフランスにおける戦争協力的な知識人を列挙し、糾弾している。

バレスとメーテルランクが憎しみの軍歌を歌う。バッハのフーガとパイプオルガンが「万国の上にドイツ国！」をとどろかせる間に、八十二歳になる老哲学者ヴントがその震える声で、ライプツツヒ大学の学生を「聖戦」に召集する。そして皆が、「野蛮人」という名称を互いになすり合う。パリ精神科学アカデミーは会長ベルクソンの声を通じて、「ドイツにたいして開始された闘いは、野蛮にたいする文明の闘いそのものである」と宣言する。ドイツの歴史界は、カール・ラムプレヒトの口を通じて、「戦争はドイツ主義と野蛮との間に開始された、そして現在の戦闘は、ドイツが幾世紀の間に、匈奴やトルコ人に対して行なつた戦闘の論理的継続である」と答える<sup>(4)</sup>。

この対比的な列挙とキーワードの引用の仕方を、加藤はほとんど露骨なまでに模倣して、彼が「新しき星莖派」と名づけた、戦争言説に協力的な知識人の批判に応用している。

廿世紀のアイフェンドルフ、リルケは、彼等を花束や北國の小川

や星の下の古い村へと誘う。カロツサとの「大いなるめぐりあい」は運命や旅や瞑想を「祝祭」する。ヘッセの物語は董の咲くシュティフタの森に、幼年時代の「想出」を甦らせる。グンドルフの「ゲーテ」は學問を代表し、ベルトラムの「ニーチェ」は情熱を代表してこの輪舞に加わる。そして、軍國主義者がドイツ人を模倣しながら、日本は神國であると唱えたのと全く同じように、時代の星董派は、ドイツ人の教師を崇めながら、又度々万葉や新古今の裡に青春の歌を索める<sup>(5)</sup>。

ここで対比されているのは、ドイツと日本における、国民の原風景の創出である。加藤が列挙しているドイツ文学の作家が、いずれもナシヨナリズムとの関連において叙述されていることに注目しよう。ドイツ人の故郷としての村や森を歌うことが、そのままファシストの民族神話を誘発する材料となったことを指摘し、それが「神國」を『万葉集』のなかに見出した戦中の学生と同一の構造をもっている、と分析してみせる。グンドルフとベルトラムは、ともにゲオルゲの影響下に出発した文学史家で、ドイツ精神の体現者としてのゲーテやニーチェの評伝を書いた。とりわけ、ベルトラムはナチによる焚書に賛成したことで知られている。加藤はドイツ式のプロパガンダがどのように日本で再利用されたかを、正確に見抜いていた。このように、加藤周一にとってロマン・ロランとは、軍国プロパガンダの虚妄を圧倒的な博識で暴き立て、それを戦鬨的なレトリックで弾劾するという知識人の一つの理想形だった、と言えるだろう

う<sup>(6)</sup>。

加藤は、ロランを中心に一九二三年に創刊された国際協調主義的な雑誌『ウーロップ』誌を読んでいた。もともと、「私は三六年の『ウーロップ』を三六年に読んだのではなく、数年経って、おそらく太平洋戦争の前夜に、拾い読みしたのである<sup>(7)</sup>」と述べているように、数年の時差がある。加藤が読んでいたのは、ちょうど『ウーロップ』が大幅な路線変更を強いられた時期にあたる。とくにスペイン内戦が勃発した一九三六年には、非戦の原則から非介入を主張したジャン・ゲエノが編集長から退くと、明確にスペイン共和派を支持する論調が目立つようになる。後任の編集長ジャン・カスーは、フランス政府がフランコ政権に武器供給を続けていることを非難し、反ファシズムの戦鬨的姿勢を明確にした<sup>(8)</sup>。一九四七年の加藤が「三〇年代の「ユーロップ」誌は、自ら二〇年代に於ける文學革命が、如何にして同時に革命文學であり得るかを、人民戦線のなかで、同じユマニスムの必然的歸結として示すことに、最も重大な役割を果した<sup>(9)</sup>」と評価しているのは、このような事情を指している。

一九四〇年以降、フランスの文芸誌の新刊はもはや日本では入手不可能となり、数年前の雑誌が最新情報のままとどまっていた。その数年の間に、『新フランス評論(NRF)』と『ウーロップ』が大きく方針を転換した。『新フランス評論』は一九四〇年からファシストのドリユ・ラ・ロシエルを編集長に迎え、『ウーロップ』は一九三九年夏に休刊に追い込まれた。そうした事情を、加藤が詳しく論じることができなかった。加藤が手本としたのは、あくまで一九三〇

年代後半の『ウーロップ』に寄稿する作家たちだった。とはいえ、「勿論私は三〇年代のフランスの條件が、四〇年代の日本の條件であつたとも、あるとも考へない。しかし、我々の現在の條件が二〇年代のフランスにちかいは、尚更考へない。フランスの話は、フランスの話で、日本の話ではないことを今更斷るまでもあるまい」と注記したうえで、加藤は『ウーロップ』に拠る作家たちが「人間性に對する信仰を、時代的條件の異なるに従ひ異なる形式で表現した必然性を理解することは、我々にとつても無益ではないと思はれる<sup>(10)</sup>」と指摘している。では、この「時代的條件」とは何か。加藤がロランとともに取り上げたブロックとゲエノを通じて、そのことを確認しよう。

#### ジャン・リシャール・ブロック

戦後に加藤が初めて公刊したフランス文学紹介の対象は、ジャン・リシャール・ブロック (Jean-Richard Bloch, 1884-1947) だった。(作家案内) ジャン・リシャール・ブロック、「文学時標」一九四六年三月一五日号。ブロックはパリのユダヤ系ブルジョワの家庭に生まれ、一九〇六年に『フランソワ一世時代の授爵——一六世紀初頭における貴族の法的小説』の定義に関する試論」と題する論文で歴史学の高等教授資格 (アグレガシオン) を取得し、高校教師となる。第一次大戦後、『ウーロップ』誌に「時評」を連載し、小説『…会社』(一九一七) や『クルドの夜』(一九二五) などと並行して、「わが時代をより良く理解するための試論」と題する一

連の評論『謝肉祭は死んだ』(一九二〇)、『世紀の運命』(一九三二)、『政治への捧げもの』(一九三三)、『文化の誕生』(一九三六) を発表した。一九三九年にはフランス共産党入党し、アラゴンとともに『今夜 (Ce soir)』誌を編集する。一九四一年五月にソビエトへ渡り、モスクワから反ファシズムのフランス語放送を続け、戦後の一九四五年になつてようやく帰国する。その間に彼の母親は、アウシユヴィッツで殺された<sup>(11)</sup>。

加藤は「私は悪夢の如き四年の間、彼「ブロック」の政治論文を讀むことを、秘かな慰めとしてゐた。高貴な魂は人を慰め、戰鬥的な精神は人を力づける。この同時代人のあることは、たとへそれが地球の反対側であつても私を励ます。まして彼を語り彼に倣ひ得る可能性がいくらかでも許されるならば、之程有難いことはない<sup>(12)</sup>」と述べ、ロマン・ロランと同様に絶賛している。加藤がとくに高く評価したのは、評論集『政治への捧げもの』だった。「それは文學的作品ではないかもしれないが、文學者の良心の証言として、ロマン・ロランの『擾乱を立ち超えて』の如く、トマス・マンの「ヨーロッパへの忠言」の如く、いや、異教徒におそらく回心を期待せずに回心をすすめてやまなかつた使徒の書簡の如く美しいのである<sup>(13)</sup>。」「文學的作品」、すなわち小説ではないが、文學的感動を覚える、というあたりは、ヴァレリーの散文を「文學」とする、加藤の文學的定義に通じる。

私は、戦争の間それを讀んだ。一九三三年のヨーロッパの政治情

勢が、時と處とを隔てた私に何の關係があつたらう。海彼岸の批評家はその綿密な分析から抽き出して提案した平和を維持する方法は、誰にも用ゐられず、戦争はおこり、現に私の周囲には爆弾が降つてゐた。今更無効であることの證明された提案に何の興味があつたらう。私がそれを讀んだのは、本来或る情勢のために書かれ、その情勢の変化すると共に無用になるべき政治的發言のなかに、一切の誤にも拘らず決してほろびない人間の理性と善意との不朽の證據を見出したと思つたからである<sup>14</sup>。

ここでも、ブロックは「理性と善意」を象徴する存在とされている。また、時代錯誤は承知の上で、時事評論を「文学」として読むという態度表明は、加藤がロランやブロックを、時事問題の分析の正確さよりも、その分析の根拠となるものに共感して読んでいたことを示している。『政治への捧げもの』の冒頭に収録された国際連盟の招待講演「我らのうちにある戦争」（一九三二）で、ブロックは、勇気と自尊心をくすぐることが人を戦争へと駆り立てる、と指摘し、戦争は政治的問題である以上に倫理的問題である、と主張した。このことは、加藤がブロックを引用した「我々もまた、我々のマンドリンを持つてゐる」（『一九四六・文学的考察』）における戦争プロパガンダ批判に通じる。ブロックによれば、知識人の役割は、政治に対して、自らの分析と主張を言い聞かせることである。講演の最後は、次のように締めくくられている。

国際連盟に対しては、人類の偉大な導き手であり、深い洞察者であつた人が、テイベリアド湖畔でペテロ、ヤコブ、アンドレに出会つた際に述べた、あの言葉を繰り返してください、と言いたい。彼は慎重な言い回しを選んだり、問いかけたりはせずに、単刀直入に命じました、「我に従え」と。

なぜなら、それこそが、人に話を聞いてもらいたいときの話し方だからです<sup>15</sup>。

テイベリアド湖は、またの名をガリラヤ湖といい、イエス・キリストが漁師だつたシモンとアンドレを勧誘した場所である（『マタイによる福音書』四章一九節）。この言い回しを半ば引用するかたちで、加藤は「知識人の任務」を次のように締めくくっている。

戦争は、凡ゆる青春を荒廃させた、既に無力であつた日本の知識階級は、戦争とインフレーションに依つて、今や、消滅の危機に瀕してゐる。それを救ふ道は、人民の中に己を投じ、人民と共に起ち上るより他に、あり得るであらうか。優れた、しかし少數の知識人にとつて、任務は、たゞ一つ、嘗て人類の教師がテイベリアドの湖畔に叫んだ如く、來れ、我に従へと、云ふ以外にあらうか<sup>16</sup>。

知識人をキリストになぞらえる比喩は、知識人とは「神の国の建設者」であると定義したロランに通じる。一方で、加藤が言う「人

民の中に」というスローガンは明らかにボルシェヴィズムの響きを伴っている。ロランの場合と同様、二〇代の加藤がブロックにおいて評価したのは、「緻密な論理、極度に現実的な戦略、逆説に彩られた速度ある文體、そしてしばしば劇的に昂揚する熱情の嵐<sup>17</sup>」だった。知識人が何を訴えるにしても、それは大衆に彼の主張を聞いてもらうことで初めて有効になる。彼が「善意と人間性」を読み取ったブロックの評論シリーズ「我が時代をより良く知るための試論」は、その内容だけでなく、あるいはそれ以上に、自らの主張をいかに伝えるかというレトリックにおいて、愛読されたと考えられる。加藤の常套句「しかし、それだけではない」という言い回しも、たとえばブロックの「悲觀主義の樂觀主義」(『世紀の運命』所収)にも頻出する。その背景には、自らの言葉に懐疑を持ってもらうことで、日本の大衆と分かり合えるかもしれないという期待があったのではないだろうか。いや、すでに大学生の頃から、彼は「レトリックの戦場<sup>18</sup>」で戦うことを密かに宣言していた。

ただし、一九五〇年以降、加藤がブロックに触れることはなかった。政治と文学に関するブロックのいくぶん教条的な態度よりも、加藤はより複雑な関係を論じるようになる。ジャン・リシャール・ブロックとは、『ウーロップ』の寄稿者として、ロランとともに戦時期の加藤を勇気づけた、青春の読書の思い出だった。

## ジャン・ゲエノ

一九二九年から一九三六年まで『ウーロップ』誌の編集長を務め

たジャン・ゲエノ (Jean Guéhenno, 1890-1978) は、小説家ではない。そうした書き手を論じること自体が、加藤のフランス文学論の特徴とも言える。靴修理工の息子として生まれたゲエノは、勤めていた靴製造工場の長期ストライキの際に、ジャン・ジョレスの演説を聞いて感銘を受け、学問を志す。高等師範学校で哲学を修め、第一次大戦で負傷した後、高校の哲学教師を務めるかたわら、著述を始める。

ゲエノは、ジュール・ロマン周辺の「僧院派」に属するルネ・アルコス (René Arcois, 1881-1959) から『ウーロップ』の編集長を受け継いだ。加藤はこのことを、「危険に臨んで人間性の擁護のために叫ぶロマン・ロランの高貴な傳統は、今や、亡命の高原を降りて労働者の子に受けつがれ、戦鬪的な姿勢をとって現れる<sup>19</sup>」と表現した。先の引用にあつた「時代的條件の異なるに従ひ異なる形式で表現した」というのは、端的には、この僧院派から社会主義への移行を指している。ゲエノ自身は、『ウーロップ』のおかげで、私は人生で最も大きな出会いを得た。何年にもわたって、ロマン・ロランのそばで、少なくとも彼の思想のそばで過ごせたのは、この雑誌のおかげである<sup>20</sup>」と回顧している。ここに表明されているロランへの敬意は、先に引用した加藤の頌辞を思わせる。

ロランのおかげで、世界に本当の意味で存在するというのがどんなことなのかを知ることができた、と私は思うときがある。ロランは、こう言ってよければ、『ウーロップ』がそういう本当の意

味で存在する雑誌であって欲しいと願っていた。ほぼ毎週、七年間ものあいだ、私はヴィルヌーヴから、いつも隅に同じウィリアム・テルの燃え上がるような肖像切手が貼られた空色の大きな封筒を受け取った。届いたのは、世界の惨状と闘争に関する最新の情報をまとめた成果だった<sup>(21)</sup>。

しかし、ゲエノは一九三六年二月に『ウーロッパ』編集長を辞任する。背景には、ヒトラー政権に対して国際的な団結を模索し、しだいに共産党寄りになっていく雑誌発行元のリーダー社の意向があった。この解任劇について、ロランはゲエノ宛の手紙で「あなたが『ウーロッパ』『ウーロッパ』と別れることを、わたしは黙認するわけにはいきません」と言う一方で、「ウーロッパ」は生きねば、生き残らねばならないのです<sup>(22)</sup>」として、あくまで雑誌側に立つことを宣告した。

ゲエノは、『ウーロッパ』の編集長を辞任する三ヶ月前の一九三五年十一月に、人民戦線を擁護する目的で週刊誌『金曜日』を創刊する。一九三七年六月の人民戦線政府崩壊を経て、一九三八年の廃刊に至るまで、ドイツとの友好的な関係を保てないかと模索した。ドイツ文化をやみくもに攻撃することは、ドレフュス事件の再来であるとさえ考えていたのである。しかし、ナチスによるオーストリア占領が現実になり、ゲエノは非戦主義の限界を思い知らされることになる<sup>(23)</sup>。ロランもまた、ゲエノが『ウーロッパ』編集長を解任された際に、「ヴァンドルデイ』『金曜日』はいささかもその代りに

はなりえません<sup>(24)</sup>」と釘を刺していた。サルトルが小説『嘔吐』(一九三七)のなかでロカントタンに「哀れなゲエノ<sup>(25)</sup>」と言わせたのは、ゲエノが独学者だったことからだけでなく、彼の優柔不断で「やわな」ヒューマニズムを揶揄してのことだろう。

こうした事情を、加藤も多かれ少なかれ知っていたはずだ。それでも彼はゲエノを「第二次世界大戦のカスサンドラ<sup>(26)</sup>」とまで呼び、同情的だった。民衆に向かって平和の大義を語り、その声が届かなかったことは、少なくとも声を上げなかったことよりも、作家の勇気を証明するだろう。加藤の長篇『ある晴れた日に』(一九四九)では、ゲエノよりも戦闘的な『番犬』の著者ポール・ニザンとわざと間違えられるかたちで言及されている<sup>(27)</sup>。サルトルの親友ニザンもまた、『ウーロッパ』の寄稿者だった。

労働者階級出身でアカデミー会員(一九六二年選出)にまでなったゲエノは、庶民から知識人になったことに対する後ろめたさを隠さなかった。彼は自分の言葉が自分の出身階層に十分に語りかけていないことに自覚的であり、それゆえ民衆が思考することを学べるようにと腐心した。『キヤリバンは語る』(一九二八)では、シェイクスピアの『あらし』に登場する現地人キヤリバンを文化から疎外されている労働者階級の象徴とし、文化を支配階級から奪取する必要性を語った。「真実は誰も除外しない。真実はよく言われるような気取り屋でもおべつか使いでもない。真実はその気前の良さによって生きているのであり、広がることで大きくなる。真実とは自ら姿を表し、伝える理性であり、理性に向かって語りかける理性である



(28)。「文化とは真実の探求であり、真実は理性の産物である、という考え方は加藤周一に通じる。『人間への回心』(一九三一)では、文化が複数形の humanities (人文学) で表されるとすれば、人間は単数形の Humane (人類) であり、この両者を合致させることが現代の知識人の課題である、と主張している(29)。そこには、人文学の成果が労働者には無縁であることへの苛立ちがあった。

ゲエノにとって、民衆と知識人は切り離されておらず、結びつき得るものだった。加藤はそこに一八世紀的理性の伝統に見出ししている。「十八世紀の諸々の精神は、ジャン・ゲーノの裡に生きてゐる。十八世紀の人間性は、二〇世紀の労働者、社会主義者、ユマニストの裡に生きてゐる。それは彼自身が理性であり、人民であり、要するに人間性そのものであるからだ(30)。「一八世紀的理性とは、実践的に理性を行使し、現実を変革しようとするものだった(31)。ルソーの伝記を著し、レーニンの伝記を書こうとしたゲエノを、加藤は一八世紀と二〇世紀をつなぐ存在として理解した。それは古典文学と戦後民主主義をつなぐ道を模索していた彼にとって、一つのモデルであったはずだ。

雑誌の編集から退いたゲエノは、ナチス占領下では沈黙を守り、一冊の本も刊行しなかった(例外は、セヴェンヌの筆名でミニユイ社から一九四四年に地下出版した『監獄にて』。マルローのようにレジスタンス活動に積極的に関与はしなかったものの、占領者に協力することも一切なかった。一九四〇年九月二四日付の日記に、ゲエノはこう書きつけている。「正義と理性を再び広めるために、どん

な方法があるというのか。私たちはかつて、祖国に反して「ヨーロッパ人」だった。今度の偽のヨーロッパに反して、私たちは何者になるのだろうか(32)。」また、『新フランス評論』に寄稿したヴァレリーについては、「フランスではすべて以前と同じように物事が続いている、と世界に思わせたい占領者の策略に手を貸している(33)。(一九四一年一月十日付)と批判している。一九四七年に『暗い年月の日記』という題名で刊行されたこの日記は、渡辺一夫訳の『フランスの青春』——加藤の論考が長い序文として付されている——と同じ一九五一年に『深夜の日記』という題名で抄訳刊行された(内山敏訳、三一書房)が、加藤があらためてこの日記を取り上げて論じることがなかった。ブロックやゲエノが戦っていたファシズムが、もはや当面の敵ではなくなっていたから、ということもある。だが、それ以上に、ゲエノが提起した民衆と知識人の問題に対する一つの回答を、レジスタンス文学に見出したからである。

## 2 レジスタンス文学

一九三九年までの『ウーロップ』と『新フランス評論』は、ナチス占領前までのフランスの知性を代表する。しかし、あれほど果敢なロランやブロックの弁論をもってしても、あるいはジツドの鋭い舌鋒によっても、ファシズムを防ぐことはできなかった。

だが、ナチス支配下において、文学は根絶したわけではなかった。フランスの主権回復を目指した文学表現、すなわちレジスタンス文

学が展開されたのである。そのことを知った加藤は、それまで自分が抱いていたフランス文学理解に限界を感じたという。「私は知的訓練における日本の「後れ」を感じた。小説作法の技巧上の問題よりも、より根本的な問題から出直す必要があった<sup>34</sup>。」より根本的な問題とは、文学者と社会との関わり方である。加藤が戦中に読み親しんでいた一九三〇年代の『ウーロッパ』誌周辺の作家たちは、ジャン・ゲエノのような労働者階級出身者も含めて、あくまで知識人として、反ファシズムの論陣を張った。しかし、レジスタンスの場合、「その支持者が、労働者、農民、知識階級、一部の資本家をふくみ、特定の階級や職業にかぎらず、フランス國民の全體にわたっていた<sup>35</sup>」こと、そして、文学者もその一部をなしていたことに、加藤は衝撃を受けたのである。

一九五一年に発表された『抵抗の文學』は、軍事政権下で抑圧され、沈黙していた日本の知識人とは対照的に、命を賭けて抵抗した言論活動に対する感動を伝えるべく書かれた、と言えるだろう。この本の原型となったエッセイ「抵抗」の詩人たち（一九五〇）では、次のように述べている。

勿論これは海彼岸の話である。しかし海彼岸のことばかりではない。我々の所には、ファシズムに對するフランス人の抵抗と同じように積極的な抵抗はなく、我々の行つた抵抗は消極的なものであり、馬鹿々々しくも悲惨な戦争の現實を避け、孤獨な生を各自の流儀に従つて秘かに営むということにすぎなかつた。

戦いと人々をうたい得なかつたのは当然であり、その詩が逃避であつたのはやむをえない結果である。しかし、馬鹿馬鹿しくも悲惨な現實は、今日でも雲散霧消したというわけではないし、それに對する積極的な抵抗は今日でもあり得る。若し積極的な抵抗を我々が人民と共に頌つならば、我々の人民の魂は我々の詩に新たな生命を吹きこむであろう。又そのときにのみ我々の詩は如何なる現實をも回避せず、困難な現實のただなかに人間性<sup>36</sup>の希望をうたうことができるであろう<sup>36</sup>。

フランスのレジスタンス詩の際立つた特徴は、その分かりやすさにある。象徴主義からシュルレアリスムへの流れのなかで、詩的言語は日常言語からかけ離れたものになつていった。というよりも、そうでなければならなくなつていった。しかし、多くの人にナチス支配への疑問や不満を高めてもらうためには、知的エリートにしか解読できない詩を書いても意味がない。そこで逆説的に、ナチス占領下では誰でも詩を書くことができた。気の利いた警句を含んだ詩が、人々の心を掴み、奮い立たせたのも事実である。エリユールが『詩人たちの名譽』というレジスタンス詩のアンソロジーを編んだとき、バンジャマン・ペレは遠いメキシコから「ここに収められた「詩」の一つとして、薬局の広告レベルの抒情を抜けていない<sup>37</sup>」と批判した。それは審美的判断としては誤りではない。高尚な表現よりも即効性が評価された時代なのだ。

## レジスタンス詩の評価軸

では、加藤は実際の詩作品をどのように読んだのか。レジスタンス文学の代表作とされるジャン・カスーの『密かに作られた三三のソネット』は、トゥールーズでレジスタンス運動に従事して逮捕されたカスーが、わずか二ヶ月の間に（加藤が『抵抗の文学』で「一年の間<sup>38)</sup>」としているのは、軍事法廷で裁判を受けた後の収監と混同しているためと思われる）、紙もペンも与えられなかった獄中で、頭のなかで書き上げたソネットを集めたものである。詩集としては一九四四年初頭に、ヴェルコールが立ち上げたミニユイ社から、ジャン・ノワールという筆名のもと、「怒れるフランス人（フランソワ・ラ・コレール）」ことアラゴンの序文付きで刊行された。このソネット集について、加藤は「カッスウの十四行詩は、彼の不在を証明している。牢獄の壁は、詩人の精神を、閉じこめることができない。彼の逃避は、じつに美事であった<sup>39)</sup>」と述べている。不在とは、詩人の精神が収容所内にとどまっていなかった、という意味である。しかし、現在、カスーの詩を「逃避」と主張する人は少数だろう。むしろ、獄中の夜の底から、精神の自由を証明すべく語り出された詩句は、それ自身が抵抗である、という評価が一般的である<sup>40)</sup>。もちろん、詩の内容そのものも、比喩を駆使して積極的な抵抗を歌っている。たとえば、「ソネット一九番」を見てみよう。

我が名はジャン。私はいかなる預言も担っていない。

閉じ込められたこの島で何も見なかったし、

砂漠で何も叫びはしなかった。私が証言するのは  
ただ夏の夜の夢のためだけだ。

別の時代の熱い星座の下で

再び見出された青春の夢のために

それはこの弾けるフィラメントの焼けるような、生き生きとした  
言葉を私が聞きたいから<sup>41)</sup>。

逃避にも思われる「夏の夜の夢」は、「再び見出された青春の夢」であり、「生き生きとした言葉を聞きたい」がために、ジャン（ヨハネのフランス語読みでもある）は証言者を買って出る。だとすれば、これは牢獄での絶望ではなく、未来の解放を見据えた詩と言うべきだろう。「カッスウの十四行詩が美しいのは、その逃避の切實さによるが、同時に、その切實さを、ことばの排列のなかに具體化した、技術の巧みさによるのである<sup>42)</sup>」と加藤は評価しているが、これは「逃避の詩」ではないし、「技術の巧みさ」を誇る詩でもない。ヴァレリーに夢中になった加藤にしては、この詩の読み方はやや上滑りしていると言わざるを得ない。

一つには、渡仏を目前にして、極度に少ない時間で書かれた書物であるためだろう。しかし、それ以上に、加藤の心を捕らえたのが、より明快で直截的な表現だったからではないか。カスーの次に紹介するジャン・ヴァールについて、加藤は「もつと直接に、何ものも奪うことのできない精神の自由をうたっている<sup>43)</sup>」と書く。実際、

詩人加藤周一の作品は、歌曲にもなった「さくら横ちよう」に見られるように、マチネ・ポエティクの同人たちのなかでも、その分かややすさが一つの際立った特徴となっていた。

そこで触れておきたいのが、現代フランス文学を論じる加藤周一が、象徴主義から出発したシュルレアリスムに対して、徹底的な無理解、あるいは無関心を貫いていることだ。フランスの詩人を論じた『現代詩人論』（一九五〇）には、シュルレアリスムの詩人は皆無である。「周知の如く、文學的流派としての象徴主義は、第一大戦と共に終つたが、象徴主義の眞の勝利の時代はむしろその後にはじまつた。二つの戦争にはさまれた二〇年間に、ダダが現れ、ダダが去り、シュール・レアリスムが興り、シュール・レアリスムが衰えたが、そのことは、逆に象徴主義の不在の光榮を強めたように思われる<sup>44</sup>」と書いているように、加藤は象徴主義の「眞の勝利」を、シュルレアリスムの「衰退」の後に見ている。つまり、彼にとつては、象徴主義はダダとシュルレアリスムによって歪められた後に、復権した何かなのだ。加藤はアラゴンについて、「超現実主義を克服して人民とのつながりを恢復しようとしたようにみえる<sup>45</sup>」と言う。シュルレアリスムから共産主義へと移行するためには、シュルレアリスムを「克服」しなければならないのである。エリュアールの「自由」について、「ほとんど童謡のように単純な形式のなかに日常的な單語を生かして、強い効果を生んでいる。そのような効果を彼は、ながい間追求してきた。彼は、抵抗が要求する民衆の詩の形式を、自らふんできた道の上にそのまま発見することができた<sup>46</sup>」と述べ

ている。エリュアールは、「超現実主義からはなれず、それを獨特の形で人間的に深めながら通ってきた<sup>47</sup>」が、その「独特な形」は「民衆の詩の形式」につながるものでなければならなかった。

おそらく一九五〇年当時の加藤は、シュルレアリスムは個人の内面の探求であるがゆえに、そのままでは国民的な文學運動の基盤になることはできない、と考えていた。人民が求める国民的運動としての文學は、誰にでも感じ取ることができ、かつ個人を超越した詩的表現でなければならぬ。それは一九四〇年代の文學的思考を結晶させた「象徴主義的風土」から離れて、文學と社会の關係をより直接的なものとして実現したいという欲求の表れであった、ということでもある。そのことは、ピエール・エマニュエルを論じた部分ではつきりと表れている。

ヴァレリーの象徴主義は、純粹詩へ向うが、エマニュエルの象徴主義は、叙事詩へ向い、民衆のイマジユ、國民的な感情、社會的現實へ向うて拡散する。ヴァレリーは、彼の精神のなかに住む古典的人物、ナルシスや蛇や若きバルクをうたうが、エマニュエルは、フランスの民衆の魂のなかに住む國民的風物、流れや森や祖國の土を歌う<sup>48</sup>。

加藤はかつて、ヴァレリーが世界を認識するために用いる理性と、その理性のはたらきとしての詩の完成度を評価した<sup>49</sup>。一方、エマニュエルを評価するのは、それが「國民的な感情」や「國民的風物」

と結びついているからだ、と言う。『1946・文学的考察』で「人民」への呼びかけを模索した加藤は、理性を媒介にした文学と民衆の結びつきが、彼が希望したほど強くならなかったことを、戦後五年間で痛感したはずだ。それだけに、フランスのレジスタンス詩は、サルトルが「沈黙の共和国」と名づけた国民感情を代弁するものとして、輝かしく映ったに違いない。「抵抗は真の民主主義だった」とサルトルは書く。「兵士にとつても、指揮官にとつても、同じ危険、同じ責任、規律のなかでの同じ絶対の自由。かくして、闇と血とのうちに、共和国のなかのもつとも強い共和国が、つくりあげられた」<sup>(50)</sup>。

### 愛国詩と抵抗詩

だが、文学と民衆の結びつき自体は、抵抗詩だけでなく、愛国詩にも見られる。散文よりも詩が強力なプロパガンダの効果をもつことは、日本の詩人たちが国策として愛国詩を多数執筆したことを思い出せば、よく分かる。たとえば、日本報国文学会が設立された一九四二年に、ある愛国詩人は次のように書いた。

わが力いま彼等の力を撃つ

必勝の軍なり

必死必殺の剣なり。

大義明かにして惑ふなく

近隣の朋を救ふべし。

彼等の牙と爪とを撃破して

大東亜本然の生命を示現すること、

これわれらの誓なり

霜を含んで夜しづかに更けたり。

わが同胞は身を捧げて遠く戦ふ

この時卓に倚りて文字をつづり

こころ感謝に満ちて無限の思切々たり<sup>(51)</sup>。

「必勝の軍」や「必死必殺の剣」という、今となつては滑稽なまでの信念（と混同された希望）と、決意の夜の静けさとの奇妙な同居が可能であるような詩が、同時代を代表する詩人であるはずの高村光太郎によつて書かれた。戦闘に駆り出されるわけでもない者がむやみに戦意を高揚させているこの詩を、愚劣だと言つてしまえばそれまでだが、こうした言葉遣いが、理性的な価値判断を狂わせ、それなりに人を動かしたことを忘れてはならない。

同じ一九四二年六月に、ポール・エリュアールは「自由」を『泉 (Fontaine)』誌に発表した。この詩は、ロンドンのド・ゴール派の雑誌『自由フランス』に転載された後、抵抗運動で山中に潜伏しているレジスタンスの闘士に向けてパラシュート投下されたことでも知られている<sup>(52)</sup>。詩はまさしく武器だったのだ。エリュアールは生活をかたちづくるあらゆるものの上に「自由」という名前を投影していく。最後の三連を、加藤周一訳で見えてみよう。

希望のない放心に

はだかの孤獨に

死の行進に

ぼくは書くお前の名を

もどつて來た健康に

消えてしまつた危険に

想い出のない希望に

ぼくは書くお前の名を

ただ一つの言葉のおかげで

ぼくはもう一度人生をはじめ

ぼくは生れた お前を知るために

お前をよぶために

自由よ<sup>53</sup>。

同時代の日本とフランスを分かつのは、詩という形式の流行ではなく、また詩が国民意識を鼓舞するという構造でもない。その表現の質である。エリュアールの「自由」の場合で言えば、占領下でのあらゆる行動が抑圧のもとにあるがゆえに、すべてが自由への欲求と繋がっていたことを、最後まで取っておかれた「自由」という言葉に収斂させる構成、そして、それぞれの行為を指す簡潔かつ強度

のある表現が、この詩を傑作としている。なお、末尾は「お前を名づける、自由と」と訳す方が適切である<sup>54</sup>。

レジスタンス文学は、当然のことだが、レジスタンスと呼ばれる政治的な抵抗運動の一環として定義される。加藤はレジスタンスを「階級の運動でも、知識人の運動でもなく、国民的目的を追求する国民の運動であつた<sup>55</sup>」と定義した。しかし、興味深いのは、階級の運動ではなかつた、と一方で言いながら、他方では「第二世界戦争が小市民階級の没落を決定すると同時に、小市民的自我の哲学も、藝術も、詩も、没落せざるを得ぬ。「略」抵抗の詩人たちにおいて歌つたのは、まさにフランスの人民の魂だつた<sup>56</sup>」と述べ、ドイツの占領に対する抵抗が、そのまま個人主義というブルジョワ文化の解体と、大衆を主体とした「人民」の文化創造の契機となつた、という見通しを示していることだ。これは明確に共産主義寄りの解釈である。

おそらく抵抗と抵抗の文學とのもつ歴史的な意味は、二十世紀のフランスが第一大戦前後から避けがたいものとして感じていた個人主義的人間觀の動搖を決定的にしたということにある。新しい人間は、市民階級のなかにはなく人民のなかには、新しい人間の現實は、世界が究極においてそのなかに還元される、人間と世界とのあるいは人間と人間を超えるものとの緊張關係のなかにあるだろう<sup>57</sup>。

『抵抗の文学』の結論は、マルクス主義（「人間と世界」とカトリック（「人間と人間を超えるもの」）が両立し得る、という風に読める。これは「天を信じた者も、信じなかった者も」というリフレインをもつアラゴンの詩「薔薇と木犀草」を踏まえて、信仰の有無にかかわらず、個人が行動によって社会に自らを結びつけることで「新しい人間」としての実存に目覚めた、という総括である。これに対しては、加藤と同時期にレジスタンス文学を取り上げた渡辺亨が、「加藤君のように、レジスタンスに加わったすべての人がこのように考えていたと見なすことは、レジスタンスを実存主義で塗りつぶしてしまうことで少しおかしい<sup>58</sup>」と批判している。また、『文学』の座談会「文学における抵抗」（一九五一年六月）でも、『抵抗の文学』について、杉浦明平や竹内好が、植民地国家であり続けたフランスにおけるレジスタンスを賛美し過ぎていて、と批判を加えている<sup>59</sup>。『抵抗の文学』は、批判も含めて、大きな議論を呼んだ本であると言えるだろう。前年の一九五〇年一月には、コミンフォルムによる日本共産党の平和革命路線批判があり、大きな波紋を呼んだ。同年の『展望』三月号には、淡徳三郎から森有正にいたる二名の作家による、やや困惑気味の回答が載せられている。そうした状況下で、『抵抗の文学』は、方針転換を迫られた共産主義者の一つの気持ちの抛り所にさえなったという<sup>60</sup>。

加藤周一にとって、国民という集団が存在することは、自明の前提だった。日本人の世界観とは何か、という命題は、同じ世界観を共有する日本人というものが現実存在するということを、事実と

して認めるということである。しかし、階級ごとに人間を規定していく論法では、もはや統一的な国民文化というものは、少なくとも識字率の著しく低かった過去には、存在しなかったことになる。文学は、文字を操ることのできる、つまりほぼ常に支配階級に近い社会階層が、創造と受容の担い手だからだ。国民文学はいかに語り得るか。このことは、日本文学史に取り組み加藤にとって、重要な課題となるだろう。

### 3 『ある晴れた日に』における「協力者」像

『抵抗の文学』が触れていない戦後フランスの問題として、対独協力者の問題が挙げられる。加藤は、フランスのレジスタンスについて、「支配階級のなかには、取引をするものがあつた。だから積極的な「協力者」があつた。しかし、労働者、農民のなかには、また中産階級の大部分と知識人のほとんど全部のなかには、なかつた<sup>61</sup>」と断言したが、これは今日の歴史研究によれば、多少の注釈が必要だろう。労働者や農民を組織した協力者団体も存在したし、ナチスに協力的な作家も決して例外的な存在ではなかつた<sup>62</sup>。

占領者に対する積極的協力ではなく、消極的抵抗があり得たことを、ヴェルユールの小説『海の沈黙』<sup>63</sup>（一九四一）が描き出している。フランス文化に敬意を抱くドイツ人青年将校が、フランス人教師の家を接収して泊まり込む。教師と姪は、これに対して沈黙を貫く。たとえ将校が善意に満ちていても、彼が占領者という立場にある限

り、交流はすべて協力になってしまふ。これは一九四二年まで書き継がれたイレヌ・ネミロフスキーの『フランス組曲』(二〇〇四)にも通じる問題である。サルトルは『文学とは何か』(一九四八)において、「海の沈黙」は、刊行の一年後にはすでに通用しない作品となっていた、と批判した<sup>(63)</sup>。サルトルにとって、「海の沈黙」は同時代に向けた非服従のメッセージが本質であり、状況が変化した後まで読み続けられることは想定できない作品だった。占領に対する消極的抵抗は、武力行使を含めた抵抗が始まった段階で、もはや意味を失ったはずだ、とサルトルは考えたのだ。

ところが、この小説が加藤の心を捉えたのは、当然のことながら、一九四五年以後である。その「物語の現実性を保証するもの」が、もはや人物の個人的な心理ではなく、人物のなかに定着された国民的感情、——作者と読者とをかつてない規模で結びつけずにはおこななかった共通の体験と共通の怒りである。その体験と怒りとに普遍性があるならば、物語は人間である誰をも感動させるはずであろう<sup>(64)</sup>と加藤は述べている。フランスの国民的感情に、加藤が一体化できるのは、その「体験と怒りとに普遍性がある」からだ。

一方、加藤が翻訳した「星への歩み」(一九四四)は、フランスを受するユダヤ系外国人が、対独協力者のフランス人に裏切られる物語である。外国人が夢見たフランスを通じて、フランスの理想を喚起するという構造だが、協力者側の葛藤は一切語られていない。フランスに好意的な外国人である加藤は、フランスの理想を裏切るフランス人の存在については、とくに何の批判もしていない。

フランス人の連帯と自由を説いた「沈黙の共和国」(一九四四)から一年後、サルトルは「占領下のパリ」において、レジスタンスは「象徴的価値」だったと苦々しく認めている。サルトルに言わせれば、「レジスタンスが無くてもイギリス軍は勝利を博したのであるうし、レジスタンスがあつても、イギリス軍は戦いに利がなければ敗北を喫していただろう<sup>(65)</sup>。」レジスタンスは、国民の統一意識をもたらしたが、実際の戦況は「世界の他の端で下された決議<sup>(66)</sup>」にかかっていた。レジスタンスが国民の大多数の積極的支持を得ていたわけではないことは、加藤自身も一九七九年の「追記」で認めることになる<sup>(67)</sup>。

より深刻な問題は、解放後に現れる。消極的な抵抗の是非ではなく、積極的にナチスに協力した人々に対する組織的な粛清である。フランスでは、一九四五年に国立粛清委員会が組織され、作家のロベール・ド・ブラジャックが死刑になった。ヒトラーの著作を刊行した出版人ドゥノエルは路上で暗殺され、セリーヌはデンマークで収監され、ドリユ・ラ・ロシエルは終戦直後に自殺した。作家の言葉に励まされて虐殺行為に加担し、正当化するような事態が出来た以上は、法的責任がないとは言えない。とはいえ、文学者を死刑に処すためには、その影響の範囲を正確に測る必要があるが、それは正確には測り得ない。したがって、文学者の処刑は象徴的な次元で理解されなければならない。逆に、作家や出版社を起訴することは、ドイツに協力した大手企業を起訴するよりも、社会的影響が少ないがゆえに、容易だったに違いない。たとえば、電力会社やガス



会社は国有化されることで、戦争責任を曖昧にされた。日本でも、多くの戦争協力企業が戦後も存続したことは、周知のとおりである。社会が一日も休まずに存続していかねばならない以上、社会的インフラを根こそぎ入れ替えるわけにはいかないのだ。

フランスとは異なり、日本では戦時中の言論を理由に処刑された文学者はいなかった。一九四六年一月に荒正人、小田切秀雄、佐々木基一によって創刊された『文学時標』は、「文学の冒瀆者たる戦争責任者を最後の一人にいたるまで、追求し、弾劾<sup>68</sup>」することを目標に掲げ、「文学検察」という連載コラムで、高村光太郎をはじめ、吉川英治、芳賀檀、保田與重郎、斎藤茂吉、獅子文六（岩田豊雄）などを批判した。加藤も第六号（一九四六年四月一日）で横光利一を担当し、「我々の日本と人民とを「理性の道」の外へ導いた戦争犯罪人<sup>69</sup>」だと、ポツダム宣言の言葉を引用しながら糾弾した。だが、このとき加藤はもちろんのこと、創刊者の三人さえも、作家の戦争責任を法的に追及することまで考えていたわけではない<sup>70</sup>。日本にはフランスのようなレジスタンスがなかっただけでなく、戦後の肅清もごく限られていた。

戦争協力者に対する加藤の態度は、雑誌『人間』に連載され、一九四九年に刊行された最初の長篇小説『ある晴れた日に』のなかに見出すことができる。確認しておきたいのは、この小説は『抵抗の文学』を準備する以前に書かれたものであるということだ。三部構成になっており、第一部と第三部は信州を舞台にし、第二部は東京大空襲が中心的事件となっている。文体は説明的で、短編集『道

化師の朝の歌』（一九四八）に収められた内省的な作品に較べると、より客観性を目指した書き方になっている。加藤自身を思わせる土屋太郎という医局生を主人公に、彼の親友の恩師である大学教授、画家とその娘、勤務先の看護婦、若い特攻志願兵や憲兵などを通じて、戦争末期（一九四五年三月から八月）の日本のあり方を描き出した小説だ。いわゆる知識階級に属する人物たちは、それぞれ戦争の大義や結末に懐疑的であるが、それに対比されるのが、憲兵の水原である。

実際、『ある晴れた日に』は、太郎と水原の関係を軸にして展開されていると言ってもよい。戦争を戦闘行為に還元するのではなく、銃後の統制にこそ戦争の本質を見出す態度は、加藤の小説の最も重要な点である。戦争とは、生命の危険に本質があるのではなく、思想の自由が日常的に制限される抑圧の経験である。したがって、加藤は、序文を書いた渡辺一夫の言葉を借りるなら、「総力戦と言われる近代戦争の最も呪わしい広い面<sup>71</sup>」を描き出そうと試みたと言える。太郎は水原が威張り散らすのを見て、「果し得ない殺意に燃えたつ渾身の憎悪<sup>72</sup>」を覚えるが、戦争終結後、駅の待合室で、妊娠中の妻を連れた水原に出くわす。水原は「こうなつちやどうにもなりませんよ」と卑屈なせりふを吐く。これを聞いた太郎は、次のように思う。

形容の言葉がないほど愚劣であり、低能であり、それだけであった。敵意などは消えてしまいい、こういう男に対して敵意をもち得

たということさえ殆ど気の迷いとしか考えられなかった。水原と  
いう存在そのものが悪夢であり、悪夢が突然さめてしまった今、  
眼の前どころがっているのは、見ず知らずの男と女のありふれた  
出来事にすぎないという気がした<sup>(73)</sup>。

海老坂武は「あのように直接的で、忌憚のない文章を書き、「人民の  
中へ」と叫んだあとで、数年前に立ち戻ってこの『ある晴れた日に』  
を書けるものだろうか<sup>(74)</sup>」と率直な疑問を呈している。確かに、戦  
争が終わり、軽蔑すべき軍人がいなくなると、太郎は「平和はぼく  
らにとつては未来だ<sup>(75)</sup>」と樂觀的に宣言する。小説末尾の「ある  
晴れた日に戦争は来り、ある晴れた日に戦争は去った<sup>(76)</sup>」という一  
文は、戦争が一貫して天候のように外部にあり、「悪夢」であるにし  
ても、結局は夢に過ぎなかったことを示唆している。その意味では、  
渡辺一夫が危惧した「軽井沢に逃避した星董派の繰り言<sup>(77)</sup>」という  
批判は、それなりに的を得ているようにも思われてくる。オペラ  
『蝶々夫人』のアリアを踏襲した題名も、皮肉でないとなれば、語  
られる出来事と不釣り合いに優雅だ。

しかし、加藤が戦時中の無力感を再度描き出そうとしたのは、自  
分がいかに「人民とともに」いなかったかを記すことで、戦争の抑  
圧とは何だったかを示し、そのことによって戦後の自分との違いを  
見出そうとする試みだったのではないだろうか。そもそも「人民」  
のほとんどは、濃淡の差はあれ、戦争に協力した、協力せざるを得  
なかった人間たちである。そうした人間を戦後に啓蒙していくつも

りなのであれば、彼らの戦争責任を追究しては、「未来」は共同  
の事業として成り立たないだろう。英雄には程遠く、情けない太郎  
青年の姿は、戦時中に社会に同化できなかったがゆえの観察者の特  
権と、社会に対して徹底的に無力だった自分を戯画化するための作  
業だったと考えられる。

『抵抗の文学』を『ある晴れた日に』の後に書くことは、戦争中  
の孤独を回想し、現在の自分との違いを明確にしたうえで、再度、  
文学と民衆との結びつきを実践面において模索するために必要だっ  
たのである。だが、その議論の延長線上で加藤自身が創作に携わる  
ことはなかった。一九五一年秋、加藤周一はフランスに飛び立ち、  
異なる視点を獲得して帰国することになる。これについては、長篇  
『運命』(一九五六)を検討する必要があるが、すでに予定の紙幅を  
超過したので、稿を改めて論じたい。

## 注

- (1) 加藤周一「序(現代フランス文学の問題)」、『現代フランス文学  
論I』、銀杏書房、一九四八年、二〇―二二頁。
- (2) ロマン・ロラン「戦乱を超えて」、『ロマン・ロラン全集』第一八  
巻、宮本正清訳、みすず書房、一九五九年、三〇頁。
- (3) 加藤周一「ロマン・ロランの肖像」、『現代フランス文学論I』、  
前掲書、七〇―七一頁。
- (4) 同上、二四頁。
- (5) 加藤周一「新しき星董派に就いて」、加藤周一・中村真一郎・福  
永武彦『1946・文学的考察』、富山房百科文庫、一九七七年、一〇

- 頁。
- (6) ただし、約四〇年後に、加藤はロマン・ロラン研究会における講演で、「ロランにないもの」として、戦争が起きる社会構造の分析と戦争原因の追求を指摘している。「(ロランは)大文学者で詩人ですから、理性に訴えるというけれど、実際は戦争をしている現実がある。どうやって戦争している人たちを説得して戦争をやめさせるか、戦争の勃発をどう防ぐのか、ただ反対といっただけではすまない。いかなる戦略が必要か、どういう組織を通じて、いかなる戦略を採用したら、戦争に有効に抵抗することができるか、という戦略論がない。」ロマン・ロランの理想主義は、ここではレーニンの『帝国主義論』とヒルファーディングの『金融資本論』の前に相対化されている。加藤周一「ロマン・ロランの反戦思想とその歴史的意味」(一九八九)、『加藤周一著作集』第二四巻、平凡社、一九九七年、七一頁。
- (7) 加藤周一「フランスから遠く、しかし……」、『羊の歌異聞』、ちくま文庫、二〇一一年、八五―八八頁。
- (8) Philippe Nigret, *La revue Europe et les romans français de l'entre-deux-guerres (1923-1939)*, Paris, L'Hamattan, coll. « Espaces littéraires », 2004, p. 198 et sq.
- (9) 加藤周一「文學の革命と革命の文學」、『現代フランス文學論Ⅰ』、前掲書、一〇六一―一〇七頁。
- (10) 同上、一〇三―一〇四頁。
- (11) Cf. Nicole Racine, « Jean-Richard Bloch ou les épreuves de la fidélité (1939-1941) », *Jean-Richard Bloch ou l'écriture et l'action*, Bibliothèque nationale de France, 2002.
- (12) 加藤周一「(作家案内)ジャン・リシャール・ブロック」(一九四六年三月一五日)、『復刻版 文学時標』不二出版、一九八六年、一八頁。
- (13) 加藤周一「ジャン・リシャール・ブロックと音楽」、『現代フランス文學論Ⅰ』、前掲書、一九八一―一九九頁。
- (14) 同上、一九九頁。
- (15) Jean-Richard Bloch, « La guerre qui est en nous », *Offrande à la politique. Troisième essai pour mieux comprendre mon temps*, Paris, Rieder, coll. « Europe », 1933, p. 50.
- (16) 加藤周一「知識人の任務」、『1946・文学的考察』、前掲書、一六五頁。
- (17) 加藤周一「ジャン・リシャール・ブロックと音楽」、『現代フランス文學論Ⅰ』、前掲書、一九八頁。
- (18) 加藤周一「覚書」(一九三九年十月三日)、鷲巢力・半田侑子編『加藤周一 青春ノート 1937-1942』、人文書院、二〇一九年、一三六頁。
- (19) 加藤周一「文學の革命と革命の文學」、『現代フランス文學論Ⅰ』、前掲書、一〇二頁。
- (20) Jean Guéhenno, *La foi difficile*, Grasset, 1957, p. 114.
- (21) *Ibid.*, p. 117-118.
- (22) 一九三六年四月二日付、ジャン・ゲエノ宛書簡。『精神の独立』ジャン・ゲエノ『ロマン・ロラン往復書簡』、山口三夫訳、『ロマン・ロラン全集』第四一巻(書簡IX)、みすず書房、一九八二年、三五三頁。
- (23) Nicole Racine, « Jean Guéhenno dans la gauche intellectuelle de l'entre-deux-guerres », *Jean Guéhenno, guerre et paix*, Presses Universitaires du Septentrion, 2009, p. 73-90.
- (24) 一九三六年四月二日付、ジャン・ゲエノ宛書簡。『精神の独立』、前掲書、三五三頁。
- (25) ジャン・ポール・サルトル『嘔吐』、鈴木道彦訳、人文書院、二〇一〇年、二〇二頁。もともと、プレイヤード版の注釈によると、サルトルはゲエノに敵意があったわけではないという。Jean-Paul Sartre, *Œuvres romanesques*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1981, p. 1781-1782.
- (26) 加藤周一「ジャン・ゲエノと批評」、『現代フランス文學論Ⅰ』、前掲書、一一八頁。
- (27) 加藤周一『ある晴れた日に』、岩波現代文庫、二〇〇九年、一九一頁。
- (28) Jean Guéhenno, « La difficile fidélité », *Caliban parle, suivi de Conversion à l'humain*, Grasset, 1962, p. 46.
- (29) Jean Guéhenno, « L'Humanité et « humanités » », *Caliban parle, op.*

cit., p. 157-177.

- (30) 加藤周一「ジャン・ゲノーと批評」、『現代フランス文学論Ⅰ』前掲書、一六〇頁。
- (31) この点については、岩津航「加藤周一とフランス文学——一九四〇年代後半の「理性」と民主主義」、『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』第十号、二〇一八年、を参照。
- (32) Jean Guéhenno, *Journal des années noires 1940-1944*, Gallimard, «Folio», 2014, p. 67.
- (33) *Ibid.*, p. 107.
- (34) 加藤周一「続羊の歌」、岩波新書、一九六八年、三三三頁。
- (35) 加藤周一「抵抗の文学」、岩波新書、一九五二年、七頁。ただし、レジスタンスへの参加度の濃淡はあった。たとえば、農民の積極的な参加の事例は、中産階級よりもずっと少なかったと考えられている。Cf. Olivier Weivorka, *Histoire de la résistance 1940-1945*, Perrin, coll. «Tempus», 2018, p. 539-547.
- (36) 加藤周一「抵抗」の詩人たち』『現代詩人論』弘文堂、一九五〇年、七二頁。
- (37) Benjamin Peret, *Le Dëshonneur des poètes* (1945), cité dans Michèle Touret (dir.), *Histoire de la littérature française du XX<sup>e</sup> siècle*, tome II – après 1940, Presses Universitaires de Rennes, 2009, p. 51.
- (38) 加藤周一「抵抗の文学』前掲書、四二二頁。
- (39) 同上、四三三頁。
- (40) アンリ・スビは「詩のすべてが、歴史的な時代と創作の時間が混ざった現在にしっかりと根づいていることを表している」と評している。Henri Scepi, « Le texte en perspective », in Jean Cassou, *Trente-trois sonnets composés au secret*, Gallimard, Folio plus classiques, 2016, p. 107.
- (41) Jean Cassou, *Trente-trois sonnets composés au secret*, op. cit., p. 53.
- (42) 加藤周一「抵抗の文学』前掲書、四五頁。
- (43) 同上、四五頁。
- (44) 加藤周一「抵抗」の詩人たち』、『現代詩人論』前掲書、五三頁。
- (45) 加藤周一「抵抗の文学』前掲書、六三頁。

- (46) 同上、八〇―八一頁。
- (47) 同上、八七頁。
- (48) 同上、九七―九八頁。
- (49) 加藤周一とヴァレリーについては、岩津航「加藤周一とヴァレリー」、坂巻康司編『近代日本とフランス象徴主義』、水声社、二〇一六年、を参照。
- (50) ジャン・ポール・サルトル「沈黙の共和国」、白井健三郎訳、『シチュアシオン III』(サルトル全集第一〇巻)、人文書院、一九六四年、九頁。
- (51) 高村光太郎「彼等を撃つ」、『愛国詩集』、日本放送協会編、一九四二年、五頁。
- (52) Michèle Touret (dir.), *Histoire de la littérature française du XX<sup>e</sup> siècle*, tome II – après 1940, op. cit., p. 48.
- (53) ルイ・パロオ編『エリュアール詩集』、加藤周一・窪田啓作・池田一朗訳、創元社、一九五二年、七八―七九頁。この訳詩集は、本来は加藤が単独で翻訳する予定だったが、渡仏までに間に合わず、窪田と池田に残りの訳を託した。
- (54) 宇佐美斉は「きみを名づけるために／自由と」と訳している(宇佐美斉編訳『エリュアール詩集』、小沢書店、八六頁)。また、安藤元雄も「君を名ざすためだった／自由と」と訳している(安藤元雄・入沢康夫・渋沢孝輔編『フランス名詩選』、岩波文庫、一九九八年、三〇七―三〇九頁)。
- (55) 加藤周一「抵抗の文学』前掲書、八頁。
- (56) 同上、一五三頁。
- (57) 同上、一七二―一七三頁。
- (58) 小場瀬卓三・渡辺淳「レジスタンス以後 現代フランス文学の展望」、大月書店、一九五二年、三二頁。一方で渡辺は「反共陣営に移ったすべての人々は、レジスタンスの伝統を裏切っているということである」(四七頁)と、明確に共産党寄りの発言をしている。
- (59) 新村猛、杉捷夫、杉浦明平、内山敏、中野重治、除村吉太郎「文学における抵抗」、『文学』第一九卷第六号、一九五一年六月、一一三―

頁。

- (60) 片岡大右「加藤周一とレジスタンス」、『ふらんす』二〇一七年八月号、六〇―六一頁。
- (61) 加藤周一『抵抗の文學』、前掲書、一六一頁。
- (62) たとえばフランス労働者・農民党 (Parti ouvrier et paysan français (POPF)) は、転向した共産主義者を組織して、ヴィシー政権に協力した。もつとも、その活動は必ずしも活発ではなかったようである。 Cf. Dominique Vannier, *Histoire de la collaboration*, Pymnalon, 2000, p. 166.
- (63) ジャン＝ポール・サルトル『文学とは何か』、加藤周一・白井健三郎・海老坂武訳、人文書院、一九九八年、八〇頁。
- (64) 加藤周一「ヴェルコールについて」、ヴェルコール『海の沈黙・星への歩み』、河野與一・加藤周一訳、岩波現代叢書、一九五一年、一五六頁。
- (65) ジャン＝ポール・サルトル「占領下のパリ」、小林正訳、『シチュアシオンIII』、前掲書、一九頁。
- (66) ジャン＝ポール・サルトル「大戦の終末」、渡辺一夫訳、『シチュアシオンIII』、前掲書、四五頁。
- (67) 加藤周一「あとがき」、『加藤周一著作集』第二巻、前掲書、六四―六七頁。
- (68) 『復刻版 文学時標』、前掲書、一頁。
- (69) 同上、二三頁。成田龍一「戦後思想史の中の加藤周一」（加藤周一『二〇世紀の自画像』、ちくま新書、二〇〇五年、一七八―一七九頁）に、この問題への言及がある。
- (70) 佐々木基一『昭和文学交流記』、新潮新書、一九八三年、一二一頁。「『文学時標』がはじめた戦争犯罪の追及も、政治的というより文学的な追及であって、追及する側の内面の責任意識を通してなされなければならぬという自覚にもとづくものであった。」
- (71) 渡辺一夫「序」、加藤周一『ある晴れた日に』、岩波現代文庫、二〇〇九年、vi頁。
- (72) 加藤周一『ある晴れた日に』、前掲書、一八五頁。
- (73) 同上、二四〇―二四一頁。

(74) 海老坂武『加藤周一——二十世紀を問う』、岩波新書、二〇一三年、七六頁。

(75) 加藤周一『ある晴れた日に』、前掲書、二三四頁。

(76) 同上、二四一頁。

(77) 渡辺一夫「序」、加藤周一『ある晴れた日に』、前掲書、v頁。

\*本論文は、科研費19K00537-01の研究成果の一部である。